

## 県指定木花村古墳表採埴輪片 2 例

和田理啓

（宮崎県埋蔵文化財センター）

### 1 はじめに

県指定木花村古墳は旧木花村（現宮崎市大字熊野、鏡洲、加江田、学園木花台を含む地域）に所在する古墳で、昭和 12 年 7 月 2 日に前方後円墳 3 基と円墳 5 基が指定されている。

その全てが、大字熊野の所在となっているが、現状で確認できるものは前方後円墳 2 基と円墳 1 基である<sup>(1)</sup>。古墳群は清武川を河口の木崎浜から 3 km 前後遡った南岸に形成されている河岸段丘上に位置している。2 基の前方後円墳は 1 号と 2 号で、1 号では、かつて石棺から鉄剣が出土したとの伝聞（木花郷土誌編纂委員会 1980 p）が残っており、2 号の墳丘上や墳丘周辺では窖焼成の埴輪が表採できる<sup>(2)</sup>。

今回報告する埴輪片は、1980 年に表採されたと記録がある円筒埴輪 1 点と、2021 年に陣ノ元遺跡発掘調査前の現地確認時に木花村古墳 2 号周辺で表採した形象埴輪 1 点である。



図 1 県指定木花村古墳位置図（1：3,000,000、1：50,000）

## 2 埴輪片について

### (1) 円筒埴輪片(図2)

資料の円筒埴輪片が保管されたビニール袋内に同封されたボールペン書きのメモは、「木花6号墳 前方後円墳 ハニワ 70800201」と読める。1980年となると、現在から40年以上前のこととなり、その点を考慮すると、ビニール袋に密閉されていたとはいえ紙やインクの劣化が少なく、メモの誤記などの可能性も考えられるが、ここでは1980年2月1日に表採されたものとしておきたい。メモにある「6号墳」であるが、1980年であったとしても、かつての航空写真などからも墳丘が確認できるのは、現在と同じく1、2、4号のみのようである。また、「前方後円墳」と明記されていること、現在、木花古墳群では2号以外の埴輪は知られていないことから、おそらくは2号で表採された資料であると考えられる。

資料は円筒埴輪の胴部で、円孔、タガが確認できる。外面の表面調整は器表の摩耗が激しく判然としない。タガは断面が低い台形状で、内面は工具によるナデ調整が確認できる。色調は明るい橙を成し、指で軽くはじくと高い金属音がするほど焼成は良い。黒斑が確認できないことも含め、窖焼成である可能性は非常に高いと考えられる。残存部位から復元される径は30cm弱である。以前、柳沢一男により2号から川西Ⅴ期の埴輪が表採されているとの報告(柳沢1997)があり、今回の資料の観察結果はこれと矛盾するものではない。

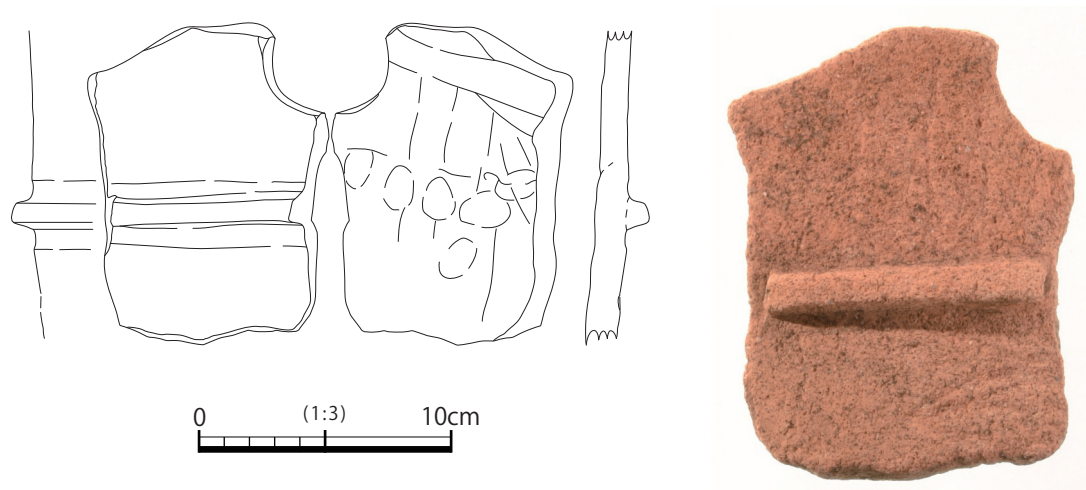


図2 木花村古墳表採円筒埴輪

### (2) 形象埴輪片(図4)

2021年2月8日に陣ノ元遺跡発掘調査の事前準備のための周辺確認で、2号周辺を踏査した際に表採したものである。

表採した箇所は、2号墳西側のくびれ部付近に造成されている墓地の敷地内である。状況から、墳丘側からの崩落土に含まれていたものと考えられる。埴輪片は棒状の破片に平たいひれ状の部位が付く。ひれ状の部位は棒状の部分と本体に接続する際の補強となる部分ではないかと考えられ、何らかの形象埴輪の一部であることは確実である。家型埴輪の鯉木などの可能性もあるが、やや反りがあり一方に向かって細くなる形状から、岩橋千塚井辺八幡古墳の武人埴輪が持つ角杯や弓などのように人物埴輪が持つ何らかの道具(大刀、弓など)であると判断した。

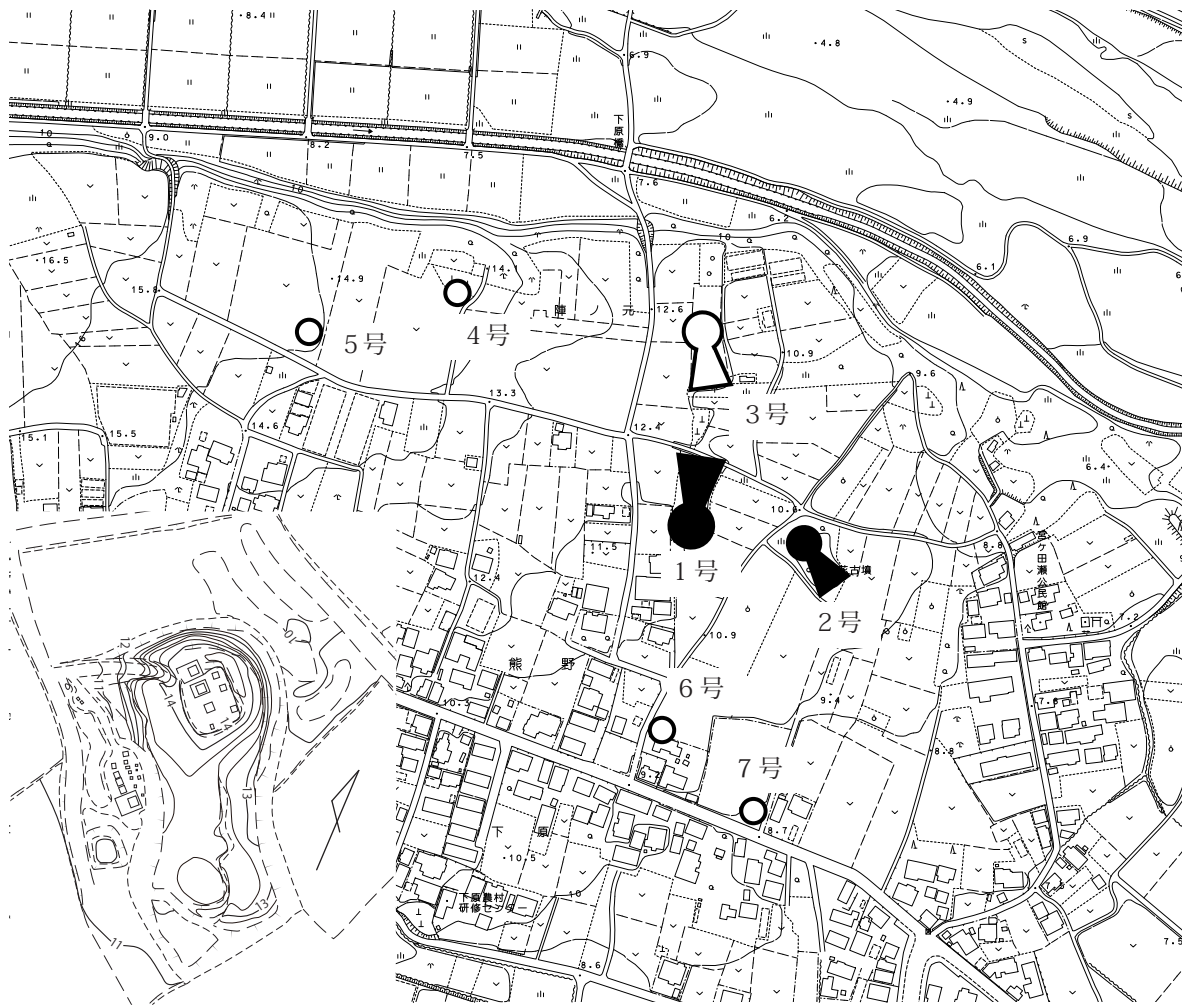


図3 木花村古墳分布図（1：5000）及び2号墳丘測量図（左下1：1000）



図4 木花村古墳表採形象埴輪

### 3 木花村古墳について

#### (1) 木花村古墳2号の築造時期について

今回の紹介資料の検討に加え、現状で把握できている情報から2号墳の築造時期を推定した。

墳丘は宮崎大学考古学研究室により詳細な測量が行われており、その結果は『前方後円墳集成』補遺編（近藤義郎 編 2000）に報告されている。墓地の造成や周辺畑地の開墾により墳丘は破壊を受けており、元の墳形を類推するのは難しい状態である。外表施設としては埴輪のほか葺石の敷設がみられる。

築造時期を類推するにあたり、以下の日向の古墳における知見を参考とする。

①日向においては葺石を敷設された後期古墳は現在まで確認されていない。

②日向においては五体を伴った人物埴輪<sup>(3)</sup>の出土例は破片を含め、新富町祇園原古墳群の百足塚と宮崎市下北方古墳群の13号墳の2基で、どちらも6世紀前半の大型前方後円墳である。また円筒埴輪は川西Ⅴ期、竹中編年の九州4期（竹中克繁 2003）相当と考えられ後期的な印象が強い。

①からは、中期以前の古墳である可能性が高いこと、②からは逆に後期古墳である可能性型いことが示唆される。

以上のことから、木花村古墳2号の築造時期は、中期末から後期の早い段階に限定されたい。

#### (2) 木花古墳群の形成について

上記のように、木花村古墳2号の築造時期が中期末から後期の早い段階に限定できるという推定が正しいとした場合、2号周辺に展開する古墳群（以下木花古墳群）形成の背景を若干検討したい。

2号周辺には、1号及び3号（消滅）の2基の前方後円墳の存在が知られている。1号については、葺石が確認できるが、埴輪の存在は確認されていない。また、かつて石棺から鉄剣が出土したとの伝聞がある。葺石の存在から、古手の様相を残すと考えられるが、築造時期の決め手には欠ける。3号については、現状、築造時期を判断できる情報は皆無である。その他、消滅している4～7号についての情報も確認できない。

以上のように非常に情報量の少ない状態での乱暴な仮定となるが、比較的時期推定の根拠が多い2号の築造時期を前方後円墳集成による10期編年（以下、集成編年）の8期後半～9期前半と考え、1号をその前段階、集成編年8期前半とし、木花古墳群の形成の開始時期と捉えたい。

同時期の南部宮崎平野で最も有力な下北方古墳群の首長墓系譜と比較すると、下北方古墳群で系譜が途絶える時期に木花古墳群の系譜が始まることとなる。石崎川流域の首長墓系譜を検討した際にも述べた（和田 2021）が、この時期は生目7号墳の築造時期とも重なり、生目系譜との関係も視野に入れ検討を行うべきだろう。また、木花古墳群の系譜に関して時期やその前後関係が正しいとするのであれば、埴輪祭祀が2号のみで行われていることにも注目される。木花の系譜が開始して以降、下北方の系譜と併存することも考慮すれば、近い時期に埴輪が採用されている下北方13号墳との詳細な比較検討を今後行う必要がある。これまで、顧みられることが少なかった木花古墳群であるが、清武川南岸という宮崎平野部の南限に位置することからも、日向の古墳時代の政治的な背景を考えるうえで重要な位置を占めていることは論を待たないだろう。

### 4 まとめ

県指定木花村古墳で採集された埴輪片2点の資料紹介をとおして、木花古墳群の若干の評価を

行った。

埴輪と墳丘の観察からは、2号は集成編年の8期後半から9期の前半に位置する可能性が高いと判断した。この判断をもとに、木花古墳群の首長墓系譜が8期前半前後から始まると仮定した。その仮定を前提に、下北方、生目の首長墓系譜との比較を行った結果、木花古墳群の形成の開始は下北方の系譜が一時期途絶える期間であり、また、生目の系譜に7号墳が築造される時期と重なる。これは、以前に行った石崎川流域の首長墓系譜の検討とも通ずる結果である。また、木花古墳群では埴輪祭祀が2号のみにしか採用されていないが、木花古墳群の系譜が、その開始以降、下北方の系譜と併存することとあわせ、注目される事象だろう。これらのことは、古墳群同士が密接に関連した、日向の古墳時代の政治的な背景の現れである可能性がある。

今回、指摘した事項に関しては、乏しい資料からの乱暴な仮説に依る部分が多く、また、以前の検討結果からの循環論法的な展開を行ったことも否めない。今後、今回提起した点について更なる資料の蓄積から実証的検証を重ねていく必要がある。

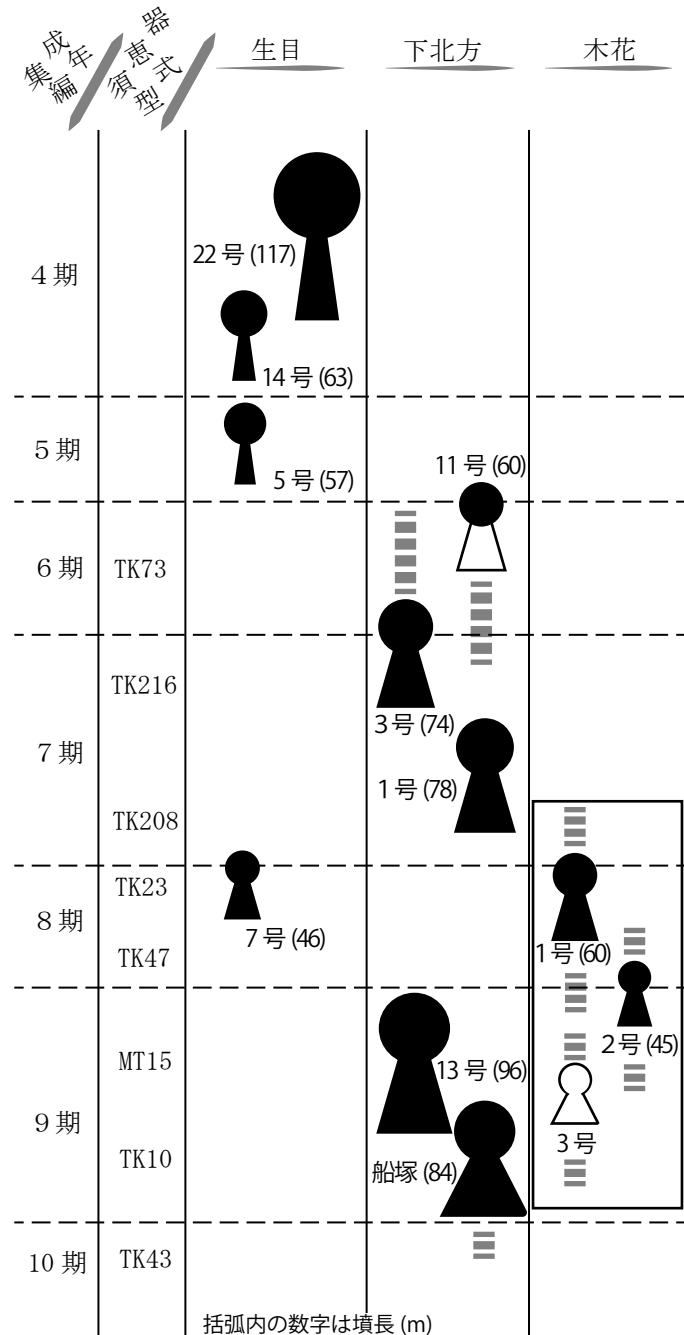


図5 生目・下北方・木花古墳群の首長墓系譜

#### 註

- (1) 宮崎市教育委員会により1号に設置されている説明板によれば、3号は1号の北側に近接してあるとされている。この箇所は、周辺畑地より若干高い部分に墓地が築かれているが、現状では墳丘が全く確認できない。説明板の図による配置では1号墳との間隔がほとんどないこともあり、分布図では微地形なども考慮し説明板よりやや北側を推定位置とした。
- (2) 木花村古墳の1号と2号については文献によって混乱がみられる。『宮崎県史』記載については、各古墳の記載内容と掲載写真については同一であるが、分布図上の番号は入れ替わっている（長津 1993）。『前方後円墳集成』九州編においては東側のものが1号墳、西側のものが2号墳となっており、補遺編で訂正されている。宮崎県に保管されている台帳の地番やその他の記録からも補遺編の訂正は妥当と考えら

れ、本稿では西側を1号墳、東側を2号墳としている。

- (3) 和銅6(713)年に日向国から分国された大隅国の範囲を含め古墳時代の日向の範疇と考えれば、古墳時代中期に神領10号に非常にリアルな武人の顔を持つ埴輪があるが、四肢や胴体のない盾持人埴輪である(橋本2008)。

#### 引用・参考文献

- 川西宏幸 1988「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』  
木花郷土誌編集委員会 1980『木花郷土誌』  
竹中克繁 2003「円筒埴輪の地域性」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設30周年記念論文集  
柳沢一男 1997「宮崎市内の古墳」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』  
長津宗重 1993「木花古墳群」『宮崎県史』資料編考古2  
近藤義郎 編 1992『前方後円墳集成』九州編  
近藤義郎 編 2000『前方後円墳集成』補遺編  
和歌山県立紀伊風土記の丘 2011『大王の埴輪・紀氏の埴輪—今城塚と岩橋千塚—』平成23年度 和歌山県立紀伊風土記の丘 開館40周年記念特別展  
橋本達也 2008「武人埴輪のその後」『鹿児島大学総合研究博物館 news letter』vol.19  
和田理啓 2021「石崎川流域の首長墓系譜について」『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第6集

#### 図出典

- 図1 国土地理院電子地形図25000をもとに作成  
図2、4 竹中美智子による実測図を和田がトレース、写真撮影は和田による  
図3 宮崎市作成 平成30年度宮崎市現況図1/2,500及び近藤2000、510頁掲載図をもとに作成  
図5 和田2021 第7図をもとに作成